魔法少女まどか☆マギカ　外伝　魔法少女さやか☆マギカ

ダル神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女まどか☆マギカ　外伝　魔法少女さやか☆マギカ

【Ｎコード】
Ｎ８３７８Ｘ

【作者名】
ダル神

【あらすじ】
どんな世界でも、どんなルートでも、改変された世界でも、さやかの最後は悲しいものでした。でも、そんなことはないんだよ。
一人で恋に突っ走って、頼まれてもいない事にその身を犠牲にして、とんでもないお節介でありがた迷惑な君は幸せになれないわけじゃあないんだよ。救われないわけじゃあないんだよ。報われないわけじゃあないんだよ。
これは、どうしようもない不幸な女の子が幸せになるお話。

これはpixivと重複連載してます

第一話　弱かったあの日の僕を、僕は一生許さない（前書き）

初めまして。ダル神です。初めて書いた小説です。みんなに読んでもらえたら嬉しいです。

どんなことでもいいので感想いただけると最高に嬉しいです。

第一話　弱かったあの日の僕を、僕は一生許さない

僕こと上条恭介の後悔に満ちた懺悔を聞いてほしい
聞かされるほうはたまったものじゃないだろうけど聞いてほしい、
僕は語ることをやめない
たとえ誰も聞いてくれないとしても

僕は昔からヴァイオリンが得意で大好きだった
みんなが僕の音を聴いてくれることが嬉しくてみんなが笑顔になる
のが僕の誇りだった
僕は夢中になって練習した、みんなが笑顔　で聴いてくれるから、
さやかがまるで自分のことのように喜んでくれるから
それが嬉しくてたまらなかった

だけどそんな夢はすぐに終わりを告げた　あっけなく
無惨に

交通事故にあった
一瞬のことだった
気がついたらベットの上だった
意識がぼーっとするなかただ動かない左手を見ていた
とめどなく涙が出て止まらなかった

悪い夢なら早くさめてくれ
だって
こんなのあまりにも　…
理不尽じゃないか
突然すぎるじゃないか
そんなの現実として受け止められるわけないじゃないか

受け入れるわけないじゃないか
なんで僕なんだ
弱い僕はどうしても認めることができなくて
ただ現実逃避するしかなかった

あれから数日たって医者がリハビリの説明など回復は難しいなど淡々と説明してくるが頭に入らない
だれもいない病室で僕はただこの残酷すぎる世界に呆然とするしかなかった

そこで声が聞こえた
廊下に声を殺して泣いている女の子がいた
姿は見えなくても誰かはすぐにわかった
わからないはずがない
あいつはいつだって強くて優しく僕とは真逆の
僕のヒーローみたいな奴だでも今日は泣いている
誰にも涙を見せたことのないあいつが
今日は泣いている
そうだ
泣かない奴なんてこの世にいない
あいつは誰もいないところで泣いていたのだ
誰にも気がつかれないように
いつも一人で泣いていたのだ

そんなことにも気が
つかず、あいつを泣かせた自分がなさけなくて

「さやか」
僕はいつの間にかあいつの名前を呼んでいた

さやかはおずおずと顔だけひょっこり出した
さやかの顔は涙で目を晴らして真っ赤になっていた
今まで元気がよかった顔しかみてこなかったので、弱々しいさやかは新鮮でなんか萌え…
じゃない
「なんでさやかが泣いてんだよ」
「だって！恭介の…」
「それなら大丈夫、僕は決めたよ」
「え…」
「リハビリするよ、先生も可能性がないわけじゃないって」

「ほんとに？」
不安そうにさやかは言う
「ああ、もちろん」
僕は笑顔で答える

さやかの顔は笑顔になった

まるで太陽のようなさやかの笑顔をみて、やっぱりさやかはこの顔が一番にあっていて、かわいいな…

なんてことを思ってしまう

さやかのおかげで前を向いて生きていくことができる

あれから1ヶ月ほどたった
僕は毎日リハビリをして毎日さやかがお見舞いに来てくれた

お見舞いに来てくれることは嬉しくてリハビリの励みになった

ある日さやかは僕のためにクラシック曲のＣＤを買ってきてくれた

「ありがとう、さやか
これレアなＣＤでなかなか手に入らないんだ
一緒に聴こう」イヤホンを自分の片耳にしてもう一つの方をさやかにわたす
「ほぇ…う…うん」なぜか顔を真っ赤にさせておずおずと隣に座ってイヤホンをつける

僕は夢中になってさやかにこの曲を説明する

うれしいはずなのに涙が溢れて止まらなかった
それは曲が美しいとかではなく

ただ悔しくて
不安だった

このままリハビリしても回復しないのではないかという恐怖と不安

こんな美しい曲があるのに奏でることができない悔しさ

僕はさやかに気づかれないように声を殺して泣いた

あれからさやかはよく僕の好きなＣＤを買ってきてくれた

お金を払うといってもあたしの好きでや
ってることだからと受け取ってくれず
ただ僕の中には不安　と恐怖がつのるばかりだった

そして世界はやっぱり残酷で

僕には希望も夢もなく
ただ無惨に現実という壁に押しつぶされるだけだった

医者に現代の医学では僕の左手は治らないといわれた

薄々気づいていた
感覚がなく全く動かない左手

言われるまえから僕は知っていた

ただ認めたくなくて
受け止められなくて
わかっていた事なのにどうしてこんなに頭が真っ白になるのだろう

心にぽっかりと穴があいたみたいだ

人形みたいに力なく僕はベットの上にいた
いつベットに戻ったのかわからない

もうそんなことはどうでもいいか

すべてがどうでもいい

生きてることすら
今日もさやかがお見舞いに来てくれた

何も知らないさやかはいつもみたいにＣＤを買ってきてくれて
自慢げにだしてくる
僕にはけして奏でることのできない音楽を

僕の中で今まで溜め込んだ黒い感情が一気に溢れ出す僕は涙を流しながら

訴えるように

責め立てるように

「さやかは僕をいじめているのかい？」

自分の左手をＣＤレコーダにおもいっきり叩きつける

レコーダは音を立てて壊れて僕の左手はその破片が刺さり血を流すがそんなことはお構いなしに叩き続けた

「こんなことしても全然痛くないんだ

感覚なんてないんだ」

レコーダはとっくに壊れているが叩き続ける

いや壊れているのは僕の左手で

僕自身なんだ

「もう止めて！」

さやかは叫んで僕の左手をつかむ

あわてて看護士さんも止めに入る

それでも僕は止まらない

温かいはずのさやかの手のはずなのに何も感じないんだ

僕は取り押さえられるという形で体を固定される

「さやか、もう見舞いにはこないでくれないか
もう治らないんだ
さやかがくるとただ辛いだけだから」
「そんなことない！
諦めなければ、きっとなんとかなるよ！」
さやかは涙を浮かべながらいった
僕は乾いた笑顔を浮かべて
「もう諦めろって医者に言われたよ…今の医学じゃこの腕は治らない
奇跡か魔法じゃないかぎり治らないって」
「奇跡も魔法もあるんだよ！」
僕は生涯この時の僕を許さない
結果を言うと
さやかは僕のせいで
僕の左手と引き換えに
すべてを失うことになる

第一話　弱かったあの日の僕を、僕は一生許さない（後書き）

いかがでしたでしょうか？

楽しんでもらえたならこれ以上嬉しいことはありません。

感想どうかお願いします。

第二話　何と引き換えに得られた希望とも知らずに

「奇跡も魔法もあるんだよ！」
さやかは涙を浮かべながらまっすぐ僕を見ていった
さやかが帰ってから数時間がたった
何をやってるんだ僕は
僕はたださやかにあたっただけだ
さやかを傷つけただけだ
僕は最低だ
だけどそんなこと、もうどうでもいいことじゃないか
むしろよかったぐらいじゃないか
さやかもあれだけ酷いことを言われたんだ
もう2度と僕と会おうと思わないだろう
奇跡も魔法もあるんだよ！
さやかのこの言葉だけがひっかかる
まだ僕に会うつもりなのだろうか
彼女はまだ僕が大丈夫だと思っているのだろうか

僕はもうとっくに壊れているのに
彼女は僕に何を望むのだろう
でも何かがひっかかる
まるで奇跡も魔法も知っているかのような迷いなくまっすぐ僕を見る瞳
さやかのその言葉に希望をもちたくなる自分がいやになる
現実とはそんなあまいものじゃないと僕が一番理解しているはずじゃないか
あじわってきたはずじゃないか
僕は布団をかぶり、何かに怯えるようにうずくまる
もう何もかも嫌になる
僕は布団の中で自分の左手を見た
僕は驚きのあまり飛びはねるように布団を引っ剥がす
夕方に自分で傷つけた後がない
跡形もなく消えている
包帯を取ってよくみると

交通事故で痛々しく傷ついていた所もなくなっている
まるで悪い夢だったかのように傷一つない
左手をグーパーさせる
かすかに感じる感覚がうれしくてたまらない
そうだ
感覚ってこんな感じなんだ
確認するように左手を開いたり閉じたりする何が起こったのか全く
わからないけど
うれしくてたまらない
涙がとまらない
「本当だ…
さやかの言った通りだ
奇跡も魔法もあるんだ」
僕は一晩中泣いて
今おきた奇跡にただ喜ぶ
無邪気に喜ぶ

それが何と引き換えに得られた希望とも知らずに

第三話　この曲を君に捧げます

僕の左手は現代の医学では治らないと医者に言われた
だけど昨日の夜中治らないはずの左手が突然治ったのだ
なんの前触れもなく
医者にも奇跡としかいいようがないと驚ろかれた
僕は僕で嬉しさのあまり一睡もしていない
貫徹である
そのため変なテンションは目を瞑ってもらいたい
家族にいち早く連絡する
母さんも父さんも泣いて喜んでくれた
そしてさやかにも連絡しようと携帯を手に持ったとき昨日の事を思い出す
昨日あんな酷いことを言っておいて
なんて言えばいいんだ
それでもこのことはどうしてもさやかにだけは連絡しなきゃいけない
そんな気がする

電話すると出てくれない可能性があるのでメールにしよう
とりあえず左手が治ったことは秘密にしておいて
『昨日の事をどうしても謝りたい、呼びつけて悪いんだけど病院に来てくれないかな？』

すると５秒後に
『ＯＫ！学校終わったらすぐ行く！
魔法少女スーパーさやかちゃんのスピードなめんなよ！』

速！！
ていうか
テンション高！！
なんだよ魔法少女って…

まぁ僕も人のことはいえないんだけど

まさか、さやかも貫徹なのか

それにしても昨日のことは全く怒っていないようで

気にしてないようで

堪えていないようで安心した

午後３時１０分
ちょうど学校の授業が終わったころだろう

僕は病院の入り口で待っていると

さやかが手を振ってこっちに走ってくる
速！！
いま3時１１分なんだけど！授業終わってまだ1分なんですけど！
ていうか、さやか絶対授業さぼったよね！
ツッコミどころ満載のさやかだがとりあえず今は飲み込む
僕は頭を下げて
「昨日は酷いこと言って本当にごめん」
松葉杖なのであまり深くは下げられないけど
「あはは。そんなこと全然気にしてないのに！
もしかしてあんなことでさやかちゃんが落ち込んでるなんて夢見ちゃってた！！
乙女だな～」
「現役乙女に言われたくないよ
それにあれは相当な事件だったとおもうけど」
乙女なら軽くトラウマになるほどの
ああ、なるほど。さやかは乙女じゃないのか
もしかしたら４０代後半のおじさんなのかもしれない
「恭介、なにか乙女の純情を踏みにじるようなこと考えてない？」
「いえ、ぜんぜん」
よかった本当に気にしてないみたいだ　それからは僕の病室で話をしていた
「そっか、退院はまだまだなんだ」

「足のリハビリがまだ済んでないしね。ちゃんと歩けるようになってからでないと」

「手の方も一体どうして急に治ったのか理由が全くわからないんだってさ。だからもうしばらく、精密検査がいるんだって」

「恭介自身はどうなの？どっかおかしいとこ、ある？」

「いや、無さ過ぎてこわいっていうか…事故にあったのさえ悪い夢のだったみたいで
さやかの言ったとおりだ
奇跡も魔法もあったんだ」

「でしょ！」
ニカッと笑うさやか

その笑顔に僕は何度元気をもらったことだろう

ありがとうと言おうとした矢先

「そろそろ…かな？」

さやかが不意に言い出した　「恭介、ちょっと外の空気、吸いに行こ」

エレベーターに乗ってついた所は屋上だった

屋上には父さん母さんや先生、看護士さんが集まっていた

みんなが拍手をしてくれる
僕はただ呆然とするしかなくて
「みんな…」
「本当のお祝いは、退院してからなんだけど…足より先に手が治っちゃったしね」
さやかは本当に嬉しそうに微笑む
そこに、父さんが出てきて
狼狽える僕にヴァイオリンを手渡す
「お前からは処分してくれと言われたが…どうしても捨てられなかった」
僕は泣くほどうれしかっけど涙をこらえて
さやかを見る
そしてさっき言えなかった言葉を口にする
「さやか…本当にありがとう
お礼はいいたりないけれど…」「ちょっと！いきなり何言って…！
恥ずかしいじゃん！」
「この曲をさやかに送ります」

僕はヴァイオリンを奏でた

もちろん久しぶりに弾いたから失敗だらけだけど

それでもさやかは涙をこらえるように満面の笑顔を見せてくれた

幸せそうな笑顔を見せてくれた

ああ、これが僕の誇りだ

第四話　君をどうしようもなく壊してしまった僕は…

今日と言う日を僕は、上条恭介は一生わすれない
さやかを壊した日をわすれない
さやかさやかさやかさやかさやかさやかさやかさやかさやかさやかさやか
君はもう笑ってくれない
僕に笑顔を見せてくれないだろう
僕のかわりに壊れてしまったさやか
僕のせいで壊れてしまった
僕は壊れたままでよかったんだ
僕は今まで笑って幸せそうに生きた自分が恥ずかしい
殺してしまいたいほど恥ずかしい
僕は生きるべきではなかった
あの病院で死ぬべき
だったんだ
あの事故の日に死ぬべきだったんだ
なんでさやかがかわりなんだ

なんでこんなことになってしまったんだ
僕のせいだ

なんでさやかは泣いている

僕のせいだ

なんでさやかは壊れた僕のせいだ

なんでさやかは苦しんでいる

僕のせいだ僕のせいだ僕のせいだ僕のせいだ僕のせいだ僕が生きていたからだ

僕が幸せをのぞんでしまったからだ

僕が誇りと生きがいを求めてしまったからだ

僕の弱さのせいだ

僕はあの日の理不尽さを受け入れるべきだったんだ

あの残酷な現実を恋人のように愛するべきだったんだ

できることならあの日の僕を殺したい

さやかを追い詰めた張本人である僕を殺したい

殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい
僕は僕を殺したい
滑稽だ
あの屋上でしたり顔で演奏した自分が
さやかを幸せにさせたと思っている自分が
滑稽だ滑稽だ滑稽だ滑稽だ滑稽だ滑稽だ
だってこんなことあるか
僕の左手はさやかの全てを喰い潰してできたものだ
僕はさやかを喰い潰して生きている僕の幸せは僕の大切なものを喰い潰さないとなりたたない
さやかはあんなに僕に元気を幸せをくれたのに
僕はさやかの幸せを元気を奪うことしかできない
僕はさやかに何一つしてやれない
さやかを苦しめることしかできない
さやかがさやかがさやかがさやかがさやかが
あああああアアアア

いやだ

考えたくない

何も考えたくない

これほどの苦しみがあるか

このまま壊れて死んでしまいたい

なんで僕はまだ生きている

僕は死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ

誰か僕を殺してくれ　見るも無惨な姿に変えてくれ

ただの肉の塊に変えてくれ

僕はもうとっくに狂っていた

僕がどうしてこんなにも狂ってしまったのか思い出してみよう　左手が治って数日後僕は松葉杖で学校に行っていた。

僕は久しぶりに会うクラスメイトと楽しそうに何かを話していたのだと思う。

どんな話をしていたかなんてどうでもいい。

僕は気がついてあげられなかったのだ

いや、気にはなっていたのだと思う。

彼女が苦しんでいることを。

いや、ただの言い訳だ。

僕は認めたくないだけだ。
彼女を苦しめながら
僕は浮かれてはしゃいでいた。
僕が浮かれて喜べば喜ぶほど彼女は苦しんでいただろう。
でも僕は浮かれてはしゃいで喜んでしまった。
学校に来れることがうれしくて。
もとの生活に帰って来れたのがうれしくて。
彼女に話しかけることができなかった。
彼女を一人にすることしかできなかったんだ。　僕はクラスの友達と、僕の回復祝いにカラオケにいった

その帰りに暁美ほむらさんに出会った

彼女と偶然あったおかげで僕は気ずくことができた

彼女なしでは信じることができなかった
彼女のおかげで僕は狂った
カラオケはリハビリがあると言えばすぐぬけられた

今日学校でさやかの元気がなかったのでさやかの家でも行ってみよう

カラオケボックスからでたら、そこには転校生の暁美ほむらさんがいた

初めて話すので緊張する
少しギクシャクしながら話す

「暁美さんも来てくれたんだ」

「いいえ、少し話をしましょう上条くん」

「いいけど、まさかそのためにずっとここで待ってのかい？」
彼女は無表情で答える
「なぜ私があなたのような人を待たないといけないのかしら？へんな勘違いやめてくれる」
この人怖い！
それともこれがツンデレというやつだろうか
でも彼女の人形のような無表情加減が僕にそんな勘違いをさせてくれない
「君とは初めて話すけどわかったことが一つある」「僕のこと嫌いだろ」
僕は恐る恐る涙声でいう
「あら、よくわかったわね
私はまどかを苦しめ奴はきらい
あなたも美樹さやかも」
これは別の意味で怖い
それにまどかって鹿目さんだろ
僕もさやかも彼女を苦しめた覚えはないんだが

本当は今すぐにでも逃げだしたいのだけど松葉杖なのでそれも無理だ

「あなた、魔法少女ってどんなのだと思う？」

彼女は突然そんな話を切り出した

「えっ…？」

「いいから言ってみて」

有無を言わさぬ瞳が僕を貫く

なんかさやかも魔法少女がどうとか言っていたような気がする

最近流行ってるのだろうか

「…えっと、魔法を使う女の子が悪の怪獣と戦うみたいな感じ？」

「ええ、その通りよ」

「じゃあ、魔法少女はどうやってなれると思う？」これは難しい

うーん

全然わからないので適当に答える

「ある日そらから魔法のステッキが落ちてきて、そのステッキに選ばれたから？」

「あながち間違ってないわね

でも選ぶのは悪の使者で
選ばれたものはその使者と契約すればなんでも一つ願いが叶うの
そのかわり契約を結んだ少女たちは魔法少女となって
死ぬまで魔女と戦い続けなければならない」
「そうなんだ…
で、なんで僕にその話をするんだい？
まさか僕が魔法少女オタクとでも思ったのかい？」
「いいえ、ただあなたを見ていると
まるで魔法少女にでもなったのかと思って
だってあなた奇跡でその左手が治ったのでしょう
願いが叶ったのでしょう」
「確かに奇跡だとは思うけど、でも僕は男だよ
まさか女の子に見えた？」
「確かに男は魔法少女になれないわ
じゃあ、あなたのことを思う誰かが
例えば
美樹さやかが魔法少女になったとしたら！　あなたの為に彼女は全
てを投げ出して魔法少女になったとしたら！

彼女はあなたの願いの為に死ぬまで魔女と戦いつづけるのだとしたら！」

「何を…言って…」

「ごめんなさい…

でも

覚えておいて

あなたのために一人の女の子が不幸になっているということを」

そう言って彼女は消えた

いままでのが夢だったように

まるで奇跡や魔法で消えたかのように

まさか…

そんなこと信じられる分けない

そんなことありえない

でも、そのありえない

現実では不可能なことが起こっている

例えば僕の左手

もう二度と動かないはずの
死んだはずの左手が何もなかったように生きている
でも、だからってなんで魔法少女
なんでさやかが魔法少女で、死ぬまで魔女と戦わなきゃいけないんだ
事故で奇跡の復活を遂げた実例はないわけじゃないだろ
僕もその内の１つでいいじゃないか
なんでこんなに僕はこだわっているのだろう
あんなのただの電波さんの戯言だろう
いや、ちがう
僕は聞いたことがあるんだ
彼女の確信をもった言葉を
奇跡も魔法もあるんだよ！
そうだ、確かにさやかはそう言ったんだ
まっすぐ僕を見て
いや、でも、そんな

そんなことで信じられるわけない
信じられるわけがないじゃないか
あまりに突拍子もなさすぎる
じゃあ、どうしてさやかはあんなに辛そうだったんだ
どうして、あんなに苦しんでいたんだわからない
だが不安は募るばかりだ
僕はさやかのもとへと急いで行く
危なっかしく
転びそうになりながら
さやか！
さやかー！
彼女に助けをもとめるように名を呼ぶ
僕は何かに足をつかまれて転び
つかまれる？
僕は足元をみるとそこには人間の手のようなものが

手だけが僕の足をつかんでいる
周りを見るとそこは見たこともない世界が広がっていた
歪んだ世界に
世界の終わりを連想させる門があって
そこからぐちゃぐちゃになった人間のような形のようなものが出てきて
僕に近づいてくる
わからない
怖い
足がつかまれていて逃げることもできない！
気がついたら僕の周りには怪物だらけだった
僕は怪物に囲まれて　もう終わりだと思った
青い光が怪物を一瞬にして全滅させる
それは少女だった
マントを顔にくるんだ少女だった
その少女は圧倒的な力で

青い光を身に包み込んで
怪物を殺しまわる
僕はその少女を
いやその魔法少女を知っている
顔を隠しているが
魔法と奇跡を振りまき
剣で魔を討つ彼女を知っている
さやか！
僕は彼女を呼ぶ
あいつを見間違えるわけがない
さやか！
僕は魔法少女の名前をよびつづける
大方の魔女を倒したさやかは動きを止めてこちらを見ている
顔はまだ隠したままだ
僕は足を引きずりながら近づいていく
「こないで！」

さやかが叫んだ瞬間彼女の身体が門からでた無数の腕に串刺しになる

ウソだ

さやかが

死

「うっ…、おぇええ」

僕はショックで胃の中身が逆流して地面に吐き出す

でもさやかは何でもないようにその腕を剣で切り裂いて

門を破壊する

すると周りの景色は霧のように消えてもとの見知った街路樹に出る

雨が降っていた

僕ははいつくばりながらさやかに近づいた

でもさやかの身体は穴だらけで血が噴き出していた

「さやか…」

でもすぐに彼女の身体は復元される

「えっ…」

僕がはいつくばりながら呆然としていると彼女は僕に近づいて
青い光で僕の怪我を全て治す
僕は立って歩けるようになった
立ち去ろうとする彼女の手をつかむ
「行くなさやか！」
するとさやかは顔を隠していたマントを取った
その顔はぐしゃぐしゃに泣きじゃくった顔だった「ごめんね、わたし化け物だから
化け物になっちゃったから
だから、もう、恭介とはお別れだよ」
「僕のせいなんだろ！僕の左手のせいでさやかは！」
「な…なんで、そんなこと、そんなわけない！これはわたしがかってに」
昔からさやかは嘘がへただった
「やっぱり、そうなのか…」
僕は絶望した
不安は現実となり、絶望に変わった

「僕のせいで…さやかは…」
さやかは僕の腕を振り払ってどこかへ飛んでいく
僕はさやかを追いかけながら
「待ってくれ！さやか！！」
一人叫んだ
走りながら暁美さんの言葉が僕をせめる
あなたのせいで彼女は魔女と死ぬまで戦い続ける
死なない身体
死ねない身体
化け物
僕がそうさせた
僕がさやかを化け物にさせてしまった僕はいつのまにか足を止めて、
うずくまっていた
さやかはもうダメだろう
あれは人間には耐えられない
あんなものに女の子が耐えれるわけがない

さやかはもう壊れてしまった
跡形もなく壊れてしまっただろう
いや、僕が壊して、殺してしまっただろう
だったら僕は壊れて、死ぬべきだろう
一人で壊れて、一人で死ぬべきだろう
僕はもうこの時に狂ったんだと思う

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8378x/

魔法少女まどか☆マギカ　外伝　魔法少女さやか☆マギカ

2011年10月26日02時04分発行